

月十七日に至り、救援列車が到着となり、十八日、一般居留民を安全車両に、団員は武装して前後に乗車、錦州本団に向かうこととなった。何せ国境を越えての行動であり、計画通りには行かず、北京・天津・山海関を迂回して、どうにか三十一日、奏皇島まで辿り着いたのであるが、満州国と北支那との境界地なので、ここを越えれば錦州であり、目と鼻の先に至って暫し立ち往生の状態となった。十月四日昼頃になり、米軍一個大隊が上陸し、日本軍及び居留民は米軍の指示で行動することとなり、米軍は特に強圧をかけるわけではなく、予想以上に寛大であった。翌五日夕刻、日本軍および一般居留民は北支唐山に移動することとなり、われわれは別行動をとり、天津に居留し、現地居留民団に加えてもらうことと決定し、天津貨物廠内に收容された。十二月二十日過ぎ、帰還命令が出て、塘沽港より乗船、博多港に帰還となった。思えば王道楽土、日滿一徳一心として満州建国に努力の甲斐もなく、ついに終戦となったのである。

## 私の満州での戦争体験

岩手県 佐藤 高彌

昭和二十年八月九日、ソ連軍はソ満国境を越えて各方面からなだれこんできた。

四月に、妻と二歳の長男を佳木斯の社宅に残し、満鉄が新設した駅助役科生として、六か月の卒業予定でハルビン鉄道教習所に入所中にソ連軍の侵入となった。

私は不運にも当時盲腸炎で入院手術し退院直後の身で宿舍で静養中だった。

日ソ東部国境地帯において交戦中、詳細不明であるが教習所長から全員集合の指示をうけた。十一日にくりあげ卒業式を行い、所属地に戻るようになった。時すでにおそし、留守家族との連絡は通信途絶え、やむなく私はハルビン列車区に緊急勤務にされて、その日から早速勤務について構内を歩いているうちに偶然に

も元勤務しておられた横道河子駅員達の乗車している客車にぶつかった。奇跡だった。びつくりするやら、嬉しいやら、地獄に佛のような気がした。このめぐりあわせが私の人生にとって幸せだったと感謝している。

ソ満国境の綏芬河から牡丹江間は線路づたいにソ連の重戦車の大部隊が猛進撃し、関東軍は爆雷を背負って決死の肉弾突撃して苦戦している。われわれは牡丹江鉄道局舎を爆破し、撤退した。残存社員を収容することがやっとのことである。

私は、この実情を報告し、大急ぎで列車に戻り区長の許可を得て列車に乗り元所属地に正式に復帰することができたので安心した。持ち物は何一つなく全く着のみ着のまま裸一貫である。

情報によれば、戦乱のさ中十五日をむかえ、戦況は暗く、ラジオの重大放送があったが聞けなかった。無条件降伏とのこと、信じられなかったが氣力が抜けた。

この日をさかいに日本人はすべて生命財産の保証のない無法状態の危険な生活をたどることとなる。行先

不明、列車はとにかくハルピンに向かって出発した。私は大海に浮かぶ一粒の粟のように、列車の進むまに身をまかせているだけである。

十七日の昼頃、新京だ、長春だと言いながら不気味な気持ちで降り立った。

あの広い新京駅構内には投げ捨てられた書類、品物など山のようになっている。私達は駅近くの満鉄社宅で空家になっている社宅に入った。

首都新京の日本人は軍の命令で朝鮮方面に避難列車で出発したあとだったから全く不気味な死の街であった。

牡丹江列車区の我々は二十余人ほど二階建ての社宅に落ち着いて共同生活をするようになった。

新京はソ連軍の侵入後、関東軍の後退と満軍の反乱、政府機能は無力化し、無政府状態におちいり、暴動の街新京になってしまった。

ソ連の軍司令官が入京するので新京駅構内の清掃を行い列車運転の安全を期するようにとの命令に応じて夢中で働いた。

翌十八日、社宅に満人の暴民が集団で押しかけてきた。ソ連兵は機関銃の実弾で社宅の錠を壊して、土足で侵入、金品の見さかいく取上げる。婦女子は辱められた、これを制止した我々が射殺されかかったので悲憤の涙をのんでとり止めた。

一つしかないラジオは強制的に徴発され、何もわからぬ毎日である。

国境地帯の集団開拓者の生き残りの老人、婦女子達が貨物列車で新京駅にたどりつき、破れた汚れた着物、少ない持ち物ほもぎとられ、はだしのまま、暴行を受け逃げ廻って疲れきっていた。空かんを針金で首にかけた姿である。

幾万の人々が新京に着き、窓のない、床のない学校や兵舎など空屋に収容された、空腹と寒さ、発疹チフスで私の知友人は死んだ。

新京にきて一か月がすぎる頃、妻子の疎開先が判明したので友人と二人で、危険を承知で治安の最も悪化していた吉林市の朝日小学校の収容所に迎えにたどりついた。自信もないのに、俺が生きているのだ、安心

しろ、と励まして、無事新京に引越しすることができた。

安心もつかの間、一週間目に栄養失調が因で幼い生命は戦争の犠牲者の一人となった。子の親として子に何の申しわけもできないこと、世の無常をしみじみと感じた。

十一月冬期に入り、燃料がなければ凍死する。空屋をこわして薪にして生きた。

その間、国府軍と八路軍との首都攻防の内戦が二度もあってその度毎に死線を越えた体験がある。

三月に満鉄社員の資格が無くなり、一般市民の仲間となった。生計の道はとざされ金は無く、満人農家から卵や隠匿物資を探しあててかつぎ屋になって暮し勞苦はつきない。